

鹿児島大学、C型肝炎治療薬が新型コロナウイルス感染症に対する効果を同定

鹿児島大学の研究チームが6月22日に新型コロナウイルス感染症の治療薬の候補となる薬剤を特定したと発表しました。今後は東京のバイオベンチャー企業と共に臨床試験などを通して安全性の確認をする予定で、実際に流通するには最低でも3年程度かかるとみられています。治療薬の開発に期待が持たれます。

新型コロナウイルス感染症の治療薬の候補を見つけたのは、鹿児島大学難治ウイルス病態制御研究センターと熊本大学エイズ学研究センターが再編・統合して設置されたヒトレトロウイルス学共同研究センター外部リンクの馬場 昌範センター長、同センター・鹿児島大学キャンパスの岡本 実佳准教授、外山 政明特任助教の3名からなる研究チームです。同センターに設置されているバイオセーフティーレベル3 (BSL3) 実験施設を用いた研究により、培養細胞において新型コロナウイルス（以下 SARS-CoV-2）の増殖を強く阻害する化合物を同定した



記者発表の様子

(左から)岡本 実佳 准教授、佐野 輝 学長、馬場 昌範 ヒトレトロウイルス学共

同研究センター長、外山 政明 特任助教

研究チームは普段から抗ウイルス薬の研究を進めていて、今年3月からは、これまでに保有している国内外の薬剤、およそ2000種類の中から50種類程度について新型コロナウイルスへの効果を実験しました。

その結果、C型肝炎に効果がある「フェナンスリジノン誘導体」と呼ばれる化合物が培養細胞を使った実験では現在、特例で治療薬として承認されている「レムデシビル」と同じくらいかそれ以上に新型コロナウイルスの増殖を抑える効果が確認できたということです。

この研究成果に基づき、令和2年5月18日「抗SARS-CoV-2薬」の発明を特許庁に出願、また、当該薬剤の臨床開発に着手するため、2020年6月19日東京のバイオベンチャー企業オンコリスバイオフーマと特許譲渡契約を締結しました。

今後は、オンコリスバイオフーマが国際特許出願を行うとともに、作用機序の解明、大量合成法の開発、薬物動態試験や安全性試験を実施する等、開発候補化合物の決定を行う予定です。

ヒトレトロウイルス学共同研究センターの馬場昌範センター長は「副作用の少ない、コロナウイルスに特化した薬を作りたいという強い希望がある。長期戦なので長い目で見守っていただけたら」と話していました。



馬場 昌範 ヒトレトロウイルス学共同研究センター長



実験の様子

日本語原文

<https://www.kagoshima-u.ac.jp/topics/2020/06/post-1693.html>

文 JST 客観日本編集部